

美濃の一石五輪塔

小野木 学

はじめに

一石五輪塔は、中世後期以降に畿内を中心とする広い範囲で多用された石塔である。岐阜県では美濃地方（以下、「美濃」と記す。）の南西部を中心とする範囲に分布しており、筆者らはかつてそれらを実測し、中世葬送墓制研究会で概要を発表した（小野木他 2017）。その発表資料では、一石五輪塔の分布と紀年銘の年代順に配置した実測図を提示したが、一石五輪塔が所在する寺院等の史的背景や近世初頭の一石五輪塔について言及できなかったこと、実測図の縮尺が小さく石塔の詳細が分かりにくいことなどが課題として残った。そこで、小稿では研究会後に筆者が実見・実測した一石五輪塔を加え、美濃における中世から近世前半（17世紀代）までの一石五輪塔の分布とこれまで実測した一石五輪塔の詳細を記載し、属性分類に基づく編年を提示する。

1 分布と石材

美濃における中世から近世前半の一石五輪塔は、主に美濃南西部とその周縁に分布する（図1）。美濃南西部を中心とする地形は、主に羽島市や大垣市などが位置する自然堤防地帯と、海津市が位置する三角州地帯があり、その周縁には垂井町や大野町、本巣市、岐阜市などが位置する扇状地帯と、各務原市が位置する各務原台地、関市が位置する関盆地などがある。さらに、それらを囲むように、南西部に養老・鈴鹿山地、北西部に美濃山地、関盆地の北側に美濃高地が広がる（国土庁土地局 1975）。このうち、一石五輪塔の分布は、自然堤防帯と扇状地帯に多く、その周辺の山地・高地帯等に散在する。特に一石五輪塔が狭い範囲にまとまって分布する地域は、養老町、垂井町、池田町、揖斐川町、大野町、本巣市、岐阜市などの扇状地帯であり、自然堤防地帯と三角州地帯を囲むように分



図1 一石五輪塔分布図（平成30年10月現在）

布している。また、自然堤防地帯でも大垣市墨俣町では分布が密である¹⁾。

一石五輪塔の石材は砂岩と花崗岩が多用され、その他にいわゆる笏谷石と呼ばれる福井県産の凝灰岩や石材が特定できないものがある²⁾。このうち、砂岩製の一石五輪塔が最も多い。

美濃の砂岩は、濃尾平野周縁部の山地・高地帯と、福井県や飛騨地方の境界付近の表層に確認されている(国土庁土地局 1975)。その多くは強堅な岩石で碎石原材として最適であり、一般に塊状無層理で、中～細粒で泥質岩のパッチを含むものが多いとされる。岩片・岩体のかたさは、いずれも6段階中5段階の「かたい(e5)」で硬砂岩に分類される(岐阜県企画部土地対策課 1986)。一方、東濃地域に広く分布する凝灰質砂岩の岩片・岩体のかたさは、「ややかたい(d3～d4)」である(図2上)。砂岩製一石五輪塔は、主に平野部周縁の表層砂岩帯の内側に分布しており、岐阜市より東側の分布は希薄である。また、一石五輪塔の使用石材の大半は硬砂岩であり、凝灰質砂岩は少ない。

一方、美濃の花崗岩は、主に東濃地域の恵那市や中津川市、西濃地域の揖斐郡揖斐川町貝月山周辺

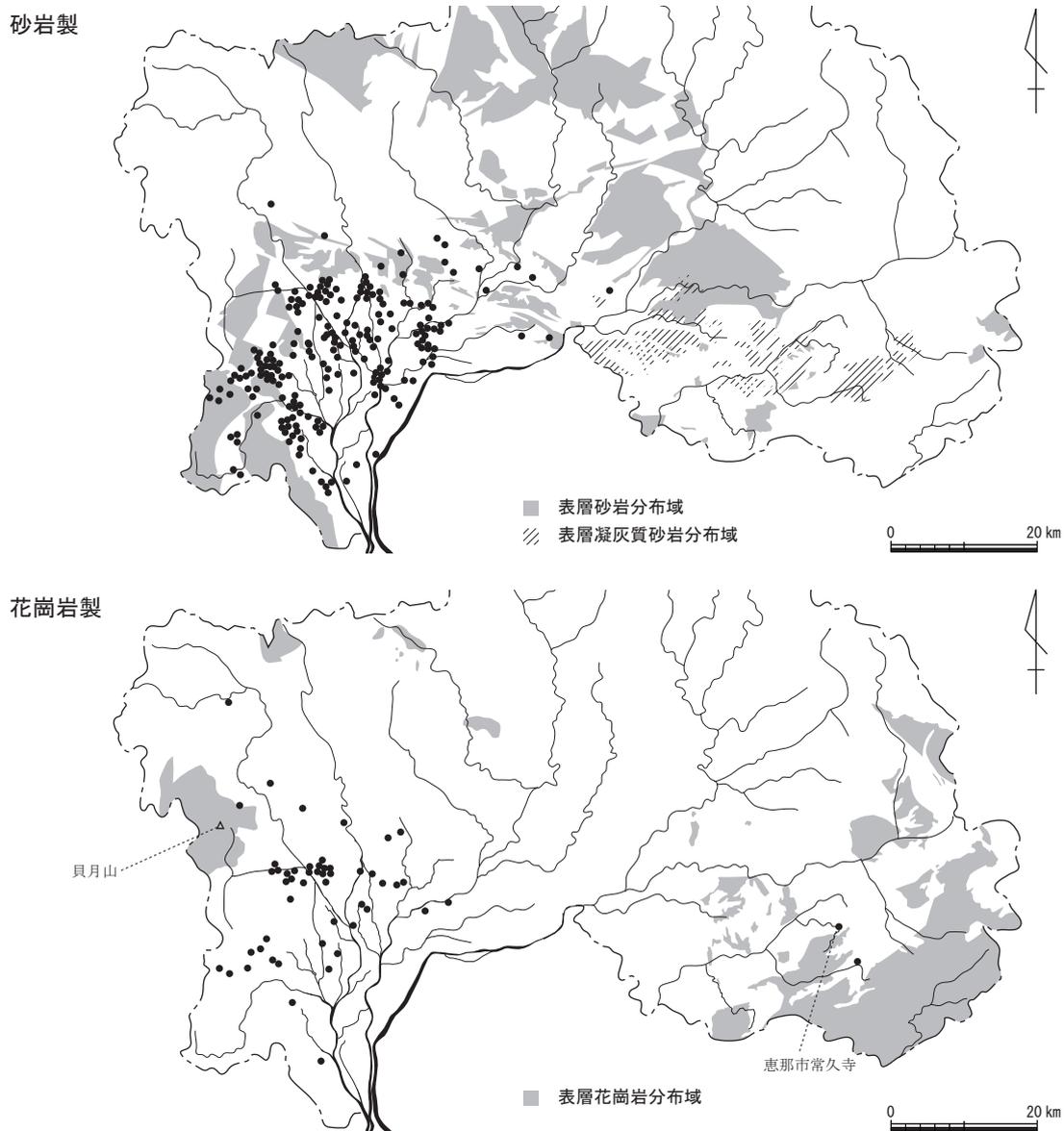


図2 石材別一石五輪塔分布図(平成30年10月現在)

などの表層に確認されている（図2下）（国土庁土地局1975）。このうち、最も広く確認されているのは東濃地域であるが、この地域における近世前半までの一石五輪塔の造立数は少ない。しかも、東濃地域の恵那市常久寺の一石五輪塔は「西三河型式の岡崎産花崗岩製品に含まれる可能性が高い」とされており、西三河型式の宝篋印塔とともに搬入したと考えられている（松井・溝口2010）。一方、その他の花崗岩製一石五輪塔は、揖斐川町貝月山付近を流れる河川の下流域にあたる揖斐川町から大野町にかけて高い密度で分布している。貝月山周辺の花崗岩の岩片・岩体のかたさは、いずれも6段階中6段階の「はなはだかたい（f6）」であるが、風化が進んだところは「マサ」化し（岐阜県企画部土地対策課1995）、現存している石塔の多くも粒状化している。

その他の石材として、福井県産の凝灰岩（笏谷石）がある。美濃では、これまで山県市南泉寺、関ヶ原町松尾山麓廃寺、同町自鏡寺の3箇所を確認しているが、今後、西濃地域を中心に確認数が増加する可能性がある。なお、これらはいずれも近世の一石五輪塔であり、南泉寺の一石五輪塔の銘文には「寛永三年」（1626年）の年号が刻まれている。

2 砂岩製一石五輪塔

次に、美濃で最も多く確認できる砂岩製一石五輪塔の詳細について記載する。掲載した実測図は紀年銘を有する資料を選択して現地で作成し、台座が確認できた場合はそれも図化した。なお、表1には実測図を掲載した一石五輪塔と台座の大きさや銘文等を示し、銘文の記載は、『日本石造物辞典』（日本石造物辞典編集委員会2012）を参考とした³⁾。

(1) 形式分類

一石五輪塔は、原則として長期間にわたり立った状態を維持することを前提として製作されるため、その機能を考える上で地輪の据え方が重要となる。そのため、既存の研究（元興寺文化財研究所1982、北野隆亮2017など）を参考とし、地輪の構造の違いによって、埋込式、安置式、柄式の3形式に分類した（図3）。

また、その基準を以下のとおりとした。

- ・埋込式：地輪側面下方に粗作り⁴⁾の加工痕が残り、底面に凹凸がみられ、原則として自立しないもの。
- ・安置式：地輪側面下方が平滑に成形され、底面が平坦であり（若しくはわずかに窪んでおり）、原則として自立するもの。
- ・柄式：有柄であり、柄穴のある台座と組み合わせるもの。

美濃におけるこれらの出現時期は、およそ埋込式が15世紀中葉から後葉、安置式が15世紀後葉、柄式が16世紀前葉以降であり、16世紀末までは埋込式と柄式が多く、17世紀以降は安置式が多い。

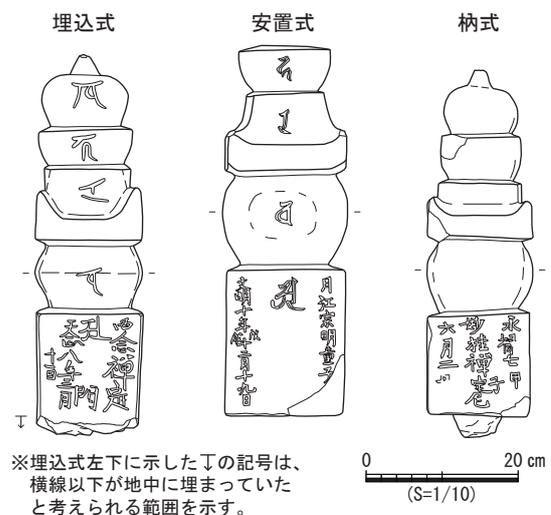


図3 一石五輪塔分類図

(2) 一石五輪塔の詳細

祖宝寺跡（不破郡関ヶ原町今須）

祖宝寺跡は真言宗の寺院であり、永正9（1512）年には複数の坊舎が存在していたとされ、明治時代以降に廃寺となった（関ヶ原町1992）。当地には祖父谷の東岸に石積みを伴う複数の平坦面が認められ、西岸の山麓に宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が並べられている。そのうち、一石五輪塔5基を図示した（図4・5）。

1～5は、いずれも17世紀代の一石五輪塔で、安置式である。1は高さ90.6cmの大型塔であり、地輪高は36.9cmで全体の3分の1以上を測る。水輪は側辺が直線的で、上下のくびれは深い。また、その横断面形は方形を呈する。火輪の軒上辺は中央から両端に向かって緩やかに反り上がり、軒端は垂直で、地輪と水輪の側辺と同一ライン上に位置する。火輪の屋根は低く、隅棟上端は風輪下方まで延びている。風輪は扁平で、その側辺はわずかに内傾している。空輪は肥大化しており、下方のくびれが深く、最大径は中央付近に位置する。2は水輪の中央部が突出し、その横断面形は隅丸方形を呈する。火輪は軒口が厚く、軒上辺は中央から両端に向かって強く反り上がる。また、火輪上面は隅丸

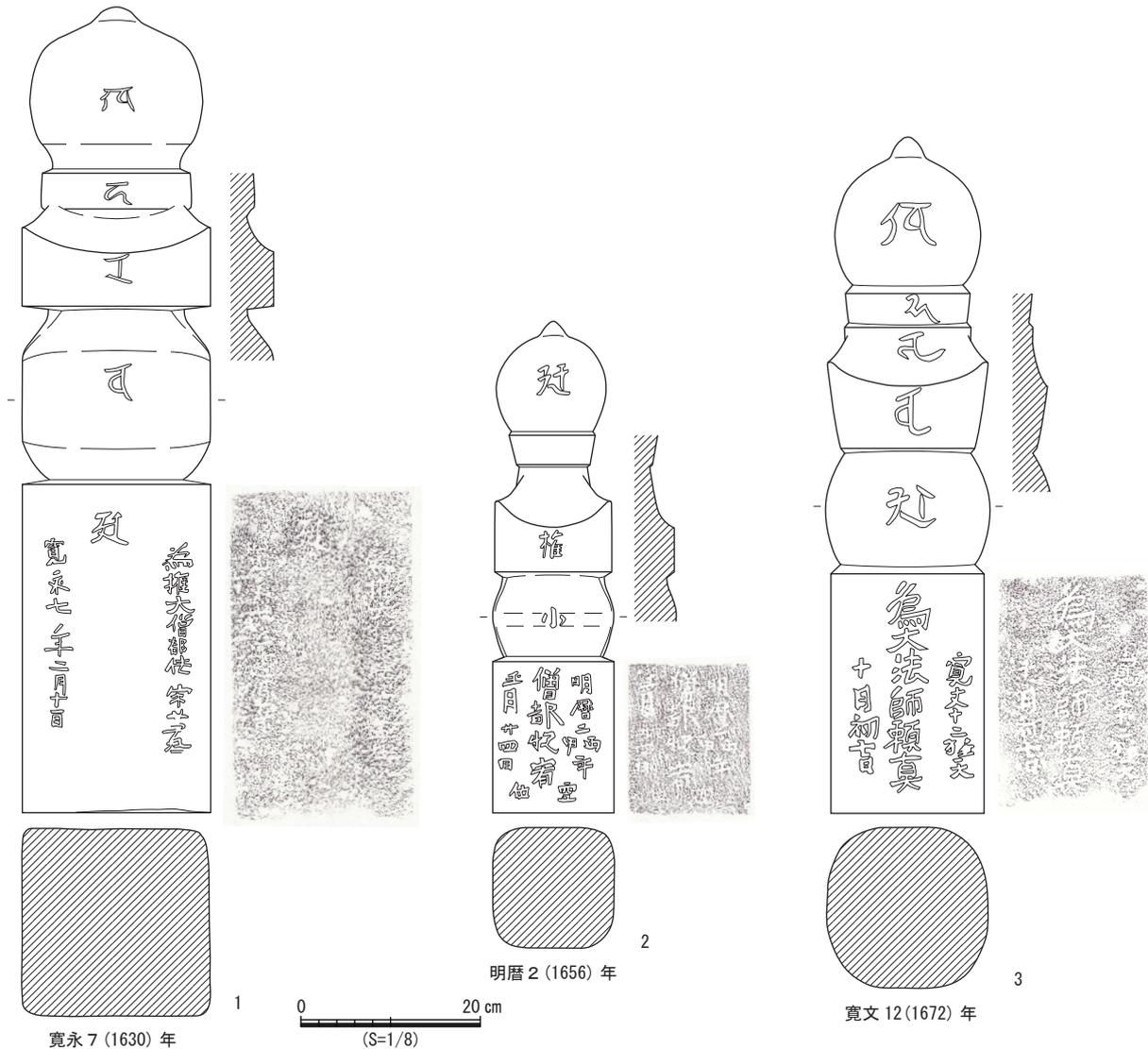


図4 祖宝寺跡石塔実測図(1)

方形を呈し、隅棟の稜線が火輪の上端まで延びていない。風輪は扁平で、その側辺は外傾しており、火輪上辺幅よりも風輪下辺径が大きい。空輪の最大径は中央付近に位置する。3は水輪が球形を呈し、その横断面形は1・2よりも丸みがある。火輪は軒口が厚く、軒上辺中央から両端に向かって強く反り上がり、軒端は外傾する。風輪は扁平で、その側辺はわずかに外傾しており、火輪上辺幅よりも風輪下辺径が小さい。空輪は肥大化し、最大径は中央よりやや下に位置する。4は高さ92.0cmの大型塔であり、地輪の正面観は正方形で、高さと同幅である。水輪は上下のくびれが浅い樽形を呈し、火輪の軒上辺は中央が直線的で両端に向かって反り上がり、軒端は垂直である。空風輪は歪んでおり左側に傾いている。5は今回図示した一石五輪塔の中では、銘文の年代が最も新しい。水輪と空風輪のくびれが浅く、水輪の横断面形と風輪下端は隅丸方形を呈する。

銘文は、2～5は地輪正面右側に年号、左側に月日、中央に法名を刻むが、1のみは右側に法名、左側に年月日を刻む。また、2のみ火輪軒口に「権」、水輪中央に「小」を刻み、地輪の「僧都」と続く。

梵字はいずれも1面のみ刻み、1・4は各輪正面に発心門の梵字（下からア・バ・ラ・カ・キャ）

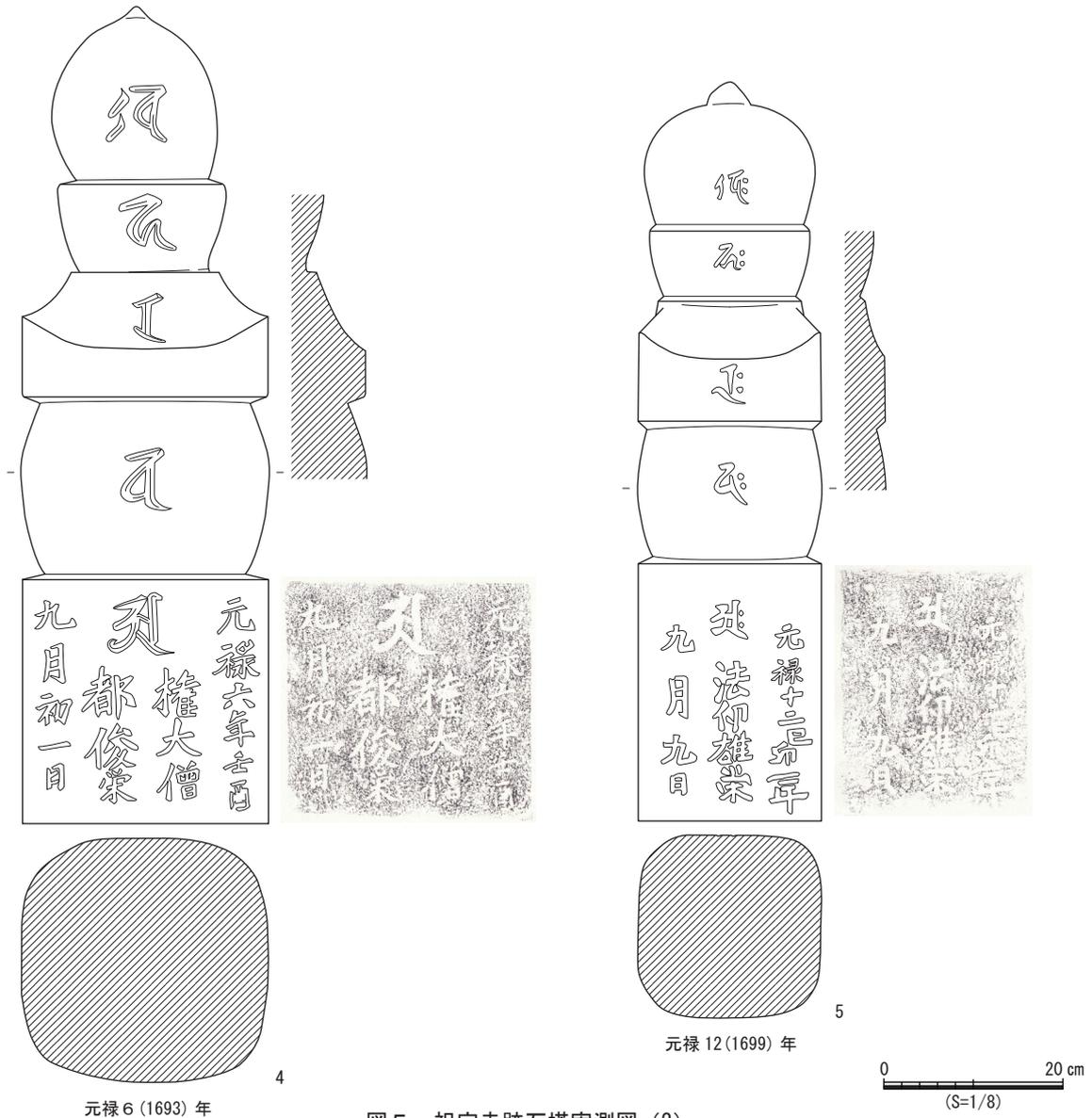


図5 祖宝寺跡石塔実測図(2)

を、5は同様に涅槃門の梵字（下からアク・バク・ラク・カク・キヤク）をそれぞれ陰刻する。一方、2は空輪のみに発心門の梵字アを刻み、3は水輪・火輪軒口・火輪屋根・風輪・空輪のそれぞれに発心門の梵字を刻む。

松尾山麓廃寺（不破郡関ヶ原町松尾）

貞享3（1686）年に笠松奉行所へ提出された松尾山絵図面には、密蔵院と自性院と考えられる二ヶ寺が松尾山麓に描かれている（関ヶ原町1992）。いずれも真言宗の寺院で近世以降に廃寺となっており、各寺院の場所が定かでないため、小稿では仮に「松尾山麓廃寺」と呼称する。当地には石積みを伴う複数の平坦面が認められ、組合せ式五輪塔や一石五輪塔などの石塔が散在しており、そのうち一石五輪塔1基と台座1基を図示した（図6）。

6は柄式であり、地輪は縦長である。水輪は最大径が突出する算盤玉形を呈し、その横断面形は隅丸方形である。地輪中央の銘文は「天正六〇」としたが、「〇」は「年」の異体字と考えられる。7は台座であり、下辺幅15.2cm、上辺幅17.4cmで、上面に円形の柄穴を有する。側面には剥離痕、上面には敲打痕が明瞭に残り、仕上げ段階の加工痕が観察できない。なお、6と7は近接して発見され（写真1）、付近に他の一石五輪塔がないことや、柄と柄穴の連結、台座と一石五輪塔の大きさに違和感がないことなどから、6と7は一具であった可能性が高い。しかし、台座は下面よりも上面が広いため安定性を欠き、側面に剥離痕が残ることなどから、この台座はもともと地中に埋められて使用することを前提として製作され、機能時には一石五輪塔のみが地上に見えていた可能性がある。

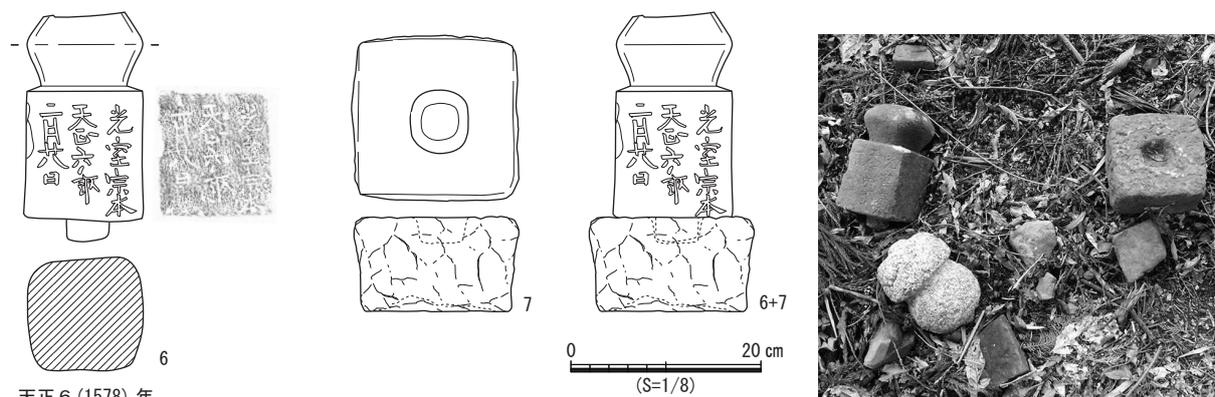


図6 松尾山麓廃寺石塔実測図

写真1 石塔発見状況

宝聚院（大垣市上石津町牧田）

宝聚院は平治元（1159）年の創建で、近江国に所在した永源寺の僧悦岩が文安元（1444）年に開基したとされている。当初は真言宗であったが、後に臨済宗に改宗した（上石津町教育委員会2004）。寺域内の墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が並べられており、そのうち一石五輪塔14基を図示した（図7・8）。

8の銘文には「文安五年」（1448年）とあり、これまで知られている美濃の一石五輪塔では最も古い紀年銘を有する。埋込式であり、水輪は最大幅が中央付近にある球形を呈し、その横断面形も円形に近い。火輪は軒上辺中央付近から両端に向かって緩やかに反り上がり、軒下辺も両端でわずかに反り上がる。空風輪はいずれも下方のくびれが深く、空輪は宝珠形を呈する。9は水輪が球形を呈し、その横断面形は隅丸方形である。火輪の軒上辺中央は直線部分が長く、両端の反り上がりも直線的で、

軒下辺端の反り上がりは見られない。10は地輪底面に自然面が残り、火輪は軒上辺端の反り上がりが顕著である。また、風輪側辺が直線的であり、空輪は扁平である。11は水輪の最大径が中央よりも上に位置し、火輪の屋根中央には稜が認められる。12は今回実測した宝聚院の一石五輪塔の中では地輪幅が最も広く、銘文も4行にわたって刻まれ、重量感のある石塔である。地輪底面の形状は丸く、剥離痕が未調整のまま明瞭に残り、埋込式のなかでも地中に深く埋め込む形態である。13は柄式であり、ほぼ完存する。風輪高が高く側辺は直線的で、空輪の最大径は中央よりやや下に位置する。14～16は水輪の中央部が突出する算盤玉型を呈し、火輪は軒上辺端の反り上がりが顕著である。また、

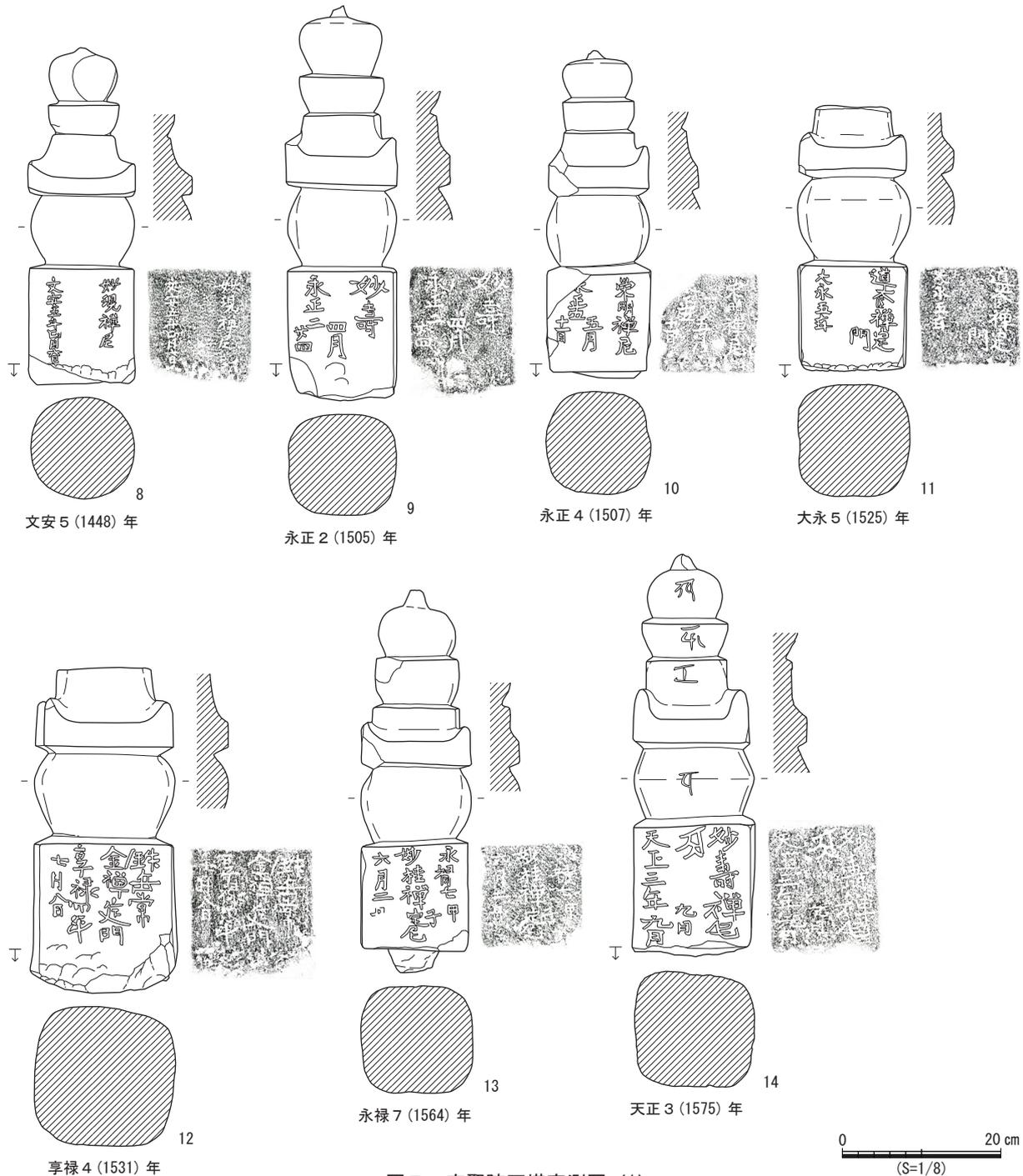


図7 宝聚院石塔実測図(1)